参加者による記録

2016年１月16日(土)

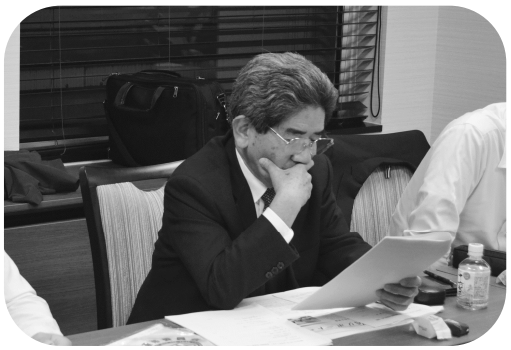
18：00～　事前説明会・結団式

今年のスタディ・ツアーは、事前説明会と結団式を羽田空港国際線に直結したロイヤルパークホテルザ羽田内で行った。

事前説明会では吉井会長の挨拶、参加者全員の自己紹介後、山岡事務局長がアジア連帯委員会の歴史・活動概要、ラオス、タイの訪問先の説明をした。その後、訪問先での役割を決め、全員で団長、副団長を決めた。

最初は緊張気味だったメンバーも懇親会での乾杯後にはかなり打ち解けた。団結式終了後、同じフロアにある国際線カウンターでチェックイン手続きを行い、両替、出国手続後、搭乗口へ向った。

事前説明会の風景



事前説明会（吉井会長）

2016年1月17日(日)

NH849　00：30　羽田発 → 05：45　タイ･バンコク

早朝、バンコク・スワナプーム国際空港に到着。バンコクエアーのラウンジで休息、事前学習会後、ビエンチャンに向け出発した。

PG943　09：45　バンコク発 → 11：00　ビエンチャン着

ビエンチャン・ワッタイ国際空港では通訳／コーディネーターのフンペンさんとＣＳＡ現地支援者のエーさんと合流し、フランス植民地であった頃の建物を改装したメルキュールホテルにチェックインした。

午後は市内のラオス麺レストランで昼食。皆にっこりしながら「意外といけるかも…」の声。

その後、タートルアン寺院、凱旋門、ラオス国立博物館を視察。夕食はラオス中華レストランで。

ビエンチャン空港で

2016年１月18日(月)

報告：宮本　亮

８：00　ホテル出発

首都ビエンチャンから車で北東へ移動。幹線道路が少ないため道は混雑していた。前日（日曜日）の市内視察は車移動だったので、月曜朝の通行量の多さに街全体が動き出したのを感じた。１時間程度車を走らせると道路がアスファルトから赤土に変わり、たまに車が徐行する程度の荒れた路面となった。

出発から２時間、幹線道路から細い道を曲がると、１つの集落に進入し、辺りに牛やニワトリなどの動物が増えてきた。コンケオ村に到着したらしい。多少上下に揺れながら車を進めること２０分、私たちは目的地のコンケオ村小学校に到着した。

10：00～　コンケオ村小学校(３番目校)

コンケオ村小学校校舎

到着してまず目に入ったのは、去年の荒天で大きなヒョウが降ったことにより破損した校舎の天井で、かなり大きな穴が開いており、雨漏り等の支障が出ている。その後、職員室でブオパン校長をはじめとする教師やＰＴＡ会長との対話を行い、「破損した屋根の補修」と、「屋根材を波トタンからスレート瓦にしたい」旨相談を受けた。

校庭にはネットが張られていないサッカーゴールがあるだけで、教室では何度も書き消したためチョークが消えなくなった黒板が使用されている教育環境だが、「その他困っていることはあるか」の問いに、「屋根が瓦になればそれで良い。材料をもらえれば村人が協力して施工を行う」と、屋根補修に対する切実な想いを感じた。

◆教師　１５人（内女性９人）　◆生徒　小学生１６６人（内女性７２人）幼稚園生９９人（内女性４７人）　◆小学校に加え幼稚園も運営、近隣５つの小学校の会議や試験を招集する中心校となっている。　◆中学への進学率　９５％　◆村民は周辺３つの村で２，２０５人（内女性１，０９２人）　◆農家が多く、田植えの時期になると、家の手伝いで学校へこない子供もいる

コンケオ村小学校で紙飛行機

その後、子供たちとの交流は折り紙を一緒に行い、新聞紙を折って作った兜をかぶり、全員並んで校庭で紙ヒコーキを飛ばし合った。

チームから学校への贈答品として、衣類やボール、綱引き用の綱などを引き渡し、文房具を子供たち一人ひとりに手渡しした。また、贈答品の綱を使用し、教師チームとメンバーの綱引き対決を行った。

交流中の子供たちはとても元気で、真っ直ぐ澄んだ瞳で私たちを見つめ、楽しそうに微笑んでくれていた。

13：30～　移動

コンケオ村からビエンチャンに戻るように、ポンサイ村小学校へ向かった。ポンサイ村の周辺は、車が大きくバウンドするような悪路である。あまりの悪路に車は時速５ｋｍくらいでしばらく走り、ようやくポンサイ村小学校へ到着した。

15：00～　ポンサイ村小学校(７番目校)

報告：宮本　亮

ポンサイ村小学校の校舎はコンケオ村小学校と比較すると新しく損傷も少なかった。しかし、ポンマン校長等の話によると、雨漏りがあるらしく、屋根材を波トタンからスレート瓦にしたい旨相談を受けた。また、生徒数が多く、部屋が足りていないようである。

◆教師　　３１人（内女性９人）　　◆生徒　　小学生４８５人（内女性２０６人）
◆教師としてポンサイ村小学校に就職した卒業生が８人　　◆中学への進学率　９５％
◆一番家が遠い生徒でも３ｋｍ程度　　◆農家が多く、田植えの時期になると、家の手伝いで学校へこない子供もいる

その後、子供たちとはコンケオ村小学校と同じく折り紙を行い、校庭で紙ヒコーキを飛ばし合った。生徒数が多いため生徒が分散する教室が多く、通訳なしで交流した教室もあったが、身振り手振りでなんとかなるものである。

交流に必要なのは挨拶（サバイディー）と笑顔とお互いが解り合おうとする気持ちだけで充分だった。コンケオ村の小学生と同じく、澄んだ瞳で一生懸命折り紙を折り、楽しそうにしてくれていた。

ラオスを訪れ初めての公式訪問が小学校の視察・交流であった。まだラオスのことを知らない私たちは、子供たちの笑顔や澄んだ瞳を見て「貧困」や「幸せ」、このような言葉の意味について早くも考えさせられた。

ポンサイ村小学校の生徒

18：30～　ＣＳＡサンティパープ高校生寮 卒寮生との交流

報告：祐延　和広

サンティパープ高校生寮の卒寮生との交流会に参加した。参加者を見ると社会人から大学生も含め３０名の卒寮生と交流することが出来た。当日のお店はラオス滞在でお世話になっているエアさんが日本人の佐古さんの後を継いで経営する佐古商店を貸し切って行われた。

交流をする中で、ラオス国立大学で日本語を専攻している卒寮生と話をする機会があり、「今年の１０月から千葉に留学する」との嬉しい報告を聞くことができた。「ラオスと日本の友好のために働きたい」との力強い発言もあり、非常に頼も

卒寮生との交流

しく感じた。（会話はすべて流暢な日本語で話をしてくれた）また、橋のインフラ関係の設計士を目指している卒寮生から、「ラオスは橋が少なく不便である。一つでも多くラオスのために橋を架ける仕事がしたい」との発言があり、日本のインフラ関係の仕事を紹介することができ、目を輝かせて話を聞いている姿が印象に残った。

この交流を通して、ＣＳＡの支援活動が確実に卒寮生に夢を与えることができており、近い将来ラオスにとって無くてはならない存在になると感じた。

2016年１月19日(火)

８：30～　教育・スポーツ省中等教育局

報告：塩坂　博史

ラオスの教育・スポーツ省中等教育局を訪問した。シソウク中等教育局長（女性）が対応をして下さった。シソウク局長からは、「ＣＳＡの継続した支援により、子供たちに教育の機会を与えてくれている」こと、「生徒たちが大学レベルまでの勉強ができる」ことへの感謝の言葉があった。

教育省中等局で

ラオスの教育関連の課題は非常に多く、現状では、教育予算が足りない・教員の絶対数が不足している・学ぶ学校自体が不足している・学校の環境整備（学校がせまい）、また生徒たちの学力に格差があること等、ラオスの教育環境全般についての説明があった。さらに、「ラオス発展のためには教育の充実が重要かつ必要であるとの認識を持っており、今後もＣＳＡの支援があってこそ、生徒たちも夢をもって頑張ることができる、これからもＣＳＡの継続した支援を期待しており、これからも日本とラオスのつながりを大切にしていきたい」とのことであった。

10：00～　在ラオス日本大使館

報告：甲斐　久資

塩坂団長から挨拶をした後、大西参事官よりラオスの概要について説明を受けた。

「国土は日本の本州と同程度でありながら人口は約６５０万人。建国４０周年を迎え、本年は５年ごとに行われる党大会が行われ、国家主席などを含め大きく体制が変わる年になるとのこと。議会は一院制で定員１３２名、選挙で選ばれるが党員もしくは公務員からしか立候補できないので国民はあまり選挙に行かないとの事だった。ただ、民族・女性のバランスを考えて体制を構築している」との事であった。

大西参事官と

「国内の経済は１９９７年ＡＳＥＡＮ加盟してからここ１０年で農業主体からサービス・工業が発展。物価上昇率２％で物価も自給

分を除くとタイとほぼ同等との事。インフラ整備が顕著で鉄骨などはタイから輸入している。」また、「鉱物等の資源が豊富で輸出などはそれに頼る部分が大きい。水資源も豊富で水力発電により電力供給が安定、かつ安価。周辺国の情勢悪化や人件費高騰などによる生産リスクの分散といった観点を含め、日系企業の進出も急増しており、タイ、ベトナムで経験のある企業が主に進出してきている。ただし、人口密度が薄いため、労働集約は難しい」とのこと。

「学校については校舎を建設したいが、民族が分散していることや教師の配置も含めコストがかかりなかなか増やせないのが現状である」との説明もあった。

大西参事官から、ラオスへの支援については「支援することは非常にいいことだが、先を見た支援が必要。支援がラオスの負担にならぬよう取り組まなければならない」との話もあった。また「ラオス国民は争うことを嫌う。観察力も高く、よく人を見ている。また、民族性や精神文化も非常に高く、幸せをみんなで分かち合う。日本人も見習うところが多くある。」と述べられた。

ラオスについて知ることができ、またどのように支援をしていくべきなのかを考える良い機会となった。

12：00～　ラオス保健省との意見交換

報告：甲斐　久資

ラオス保健省の方々と昼食を交え意見交換を行った。佐山さんから挨拶の後、ブンフェン副大臣より「日本から来てくれることはうれしく思う」と感謝の意を述べられ、その後説明をして頂いた。「救援衣類は４県を回って配ってきた。一部では子供たちには衣類を配るのと同時に予防接種の注射をしている。子供たちは注射が嫌いだが、注射を受ければ衣類を貰えるから受けにくる」との説明があった。

ラオス保健省との意見交換

「今、必要な衣類は？」との質問に「北方地域（中国との国境付近など）は寒い所なのでジャケットなどの厚手のものが必要だ。次回は北の方もぜひ見てきてほしい」と応答があった。私たちの支援した衣類が必要とされていることを改めて実感した。

14：00～　ラオス保健省救援衣類保管倉庫

報告：彦坂　健太

ラオス保健省の救援衣類保管倉庫を視察した。衣類はＪＡＩＣＡからの支援で建設された医療用品格納庫の一角を借りて保管されている。

担当者によると、「救援衣類は去年１１月４日に２，８４５個到着し３ヶ月の間に半分配布した。残りは１，０６５箱、職員は８名で女性が４名、１人は産休で１人は大学に行っているので、今は６名で活動している」とのこと。少数で仕分け作業を行っている現象があった。さらに、「５２箱

ラオス衣類倉庫内で

の段ボールが壊れていた。重さで壊れたり水が入っていた物があったが、去年は衣類を袋に入れて送ったので問題は無かった」との事だった。カンケオ倉庫責任者（女性）からは「ありがとう」という感謝の言葉と「もっとたくさんの衣類が欲しい」という要望があった。

倉庫を見学し、自分たちの送った衣類が確実に届き役に立っているのを実感した。また、多くの衣類が陳列保管されているのに驚いた。今後も衣類支援とともに海外輸送費も多額になるので、輸送募金にも協力していきたいと思った。

15：00～　ラオス地雷博物館

報告：彦坂　健太

施設内にあるラオス地雷博物館（ＣＯＰＥ）を視察した。ラオスにおける不発弾問題はかなり深刻でベトナム戦争時代アメリカ軍によって投下された不発弾の数は世界最大である。この博物館内は地雷・爆弾の恐ろしさを写真や原寸大の展示物で紹介していた。

入ってまず目に付いたのが爆弾の投下された場所を赤く示す地図である。ラオス南部、中心部に大量の爆弾が落とされた事がわかった。さらにクラスター爆弾という１つの爆弾から拡散する極めて厄介な爆弾の展示もあった。

中に進んで行くとラオスの人々と爆弾の関係性を展示するコーナーがあり、そこで目にしたのは爆弾の再利用。爆弾は鉄くずなので生活用品にしたり家の柱にしている写真の展示があった。貧しい村人が鉄くずを集め売り生活の足しにしているが、そのような人々が被害に遭うそうだ。さらに子供までも爆弾と知らずに取り上げ爆破し被害に遭う事もある。

奥に進むと足を失った方の写真、義足も多く展示してあった。

近年は教育の場も増え不発弾での被害は減少してきたが、「ラオスにおける不発弾を全て処分するには今後一世紀ほど要するだろう」という事実もある事を学び、改めて戦争の怖さとラオスの方の苦労を肌で感じる場になった。

入口

クラスター爆弾のオブジェ

16：00～　難民を助ける会ラオス事務所

報告：塩坂　博史

難民を助ける会（ＡＡＲ・ＪＡＰＡＮ）のラオス事務所を訪問した。岡山事務局長と大城プロジェクトコンダクターから説明を受ける。

ＡＡＲは、１９７９年ベトナム戦争によるインドシナ難民を支援してきた国際ＮＧＯであり、世界１５か国で活動中、ラオス事務所は２０００年から活動を開始したとのこと。今後、シリアについても検討中とのこと。

具体的な活動について、①車いすの製造普及活動、②障がい者向けの小規模企業支援（ナマズの養殖等）、③不発弾問題支援活動を継続して取り組んでいる。

ベトナム戦争におけるアメリカ軍の空爆投下による不発弾は、ラオス全体で残る子爆弾８，０００万個、クラスター爆弾の子爆弾２億５，０００万個。国民一人当たりの爆弾の量８７０kgと想像を絶する量が未だに存在しており、また、多くの人たちが被害に遭っている現状があり、今までも、そしてこれからもラオスの発展に大きな障害となっている。

難民を助ける会ラオス事務所で

この処理無くして国土全体の発展はないとの認識で、継続した地道なＮＧＯの活動や国際社会の支援の必要性を感じた。

18：20～　ラオス教育・スポーツ省 初等教育局長との意見交換

報告：祐延　和広

当初の予定は８：３０からの訪問であったが、滞在期間中、ラオス人民革命党の党大会が開催されており、ミトン教育局長も党大会へ出席することから、その日の最後の予定に変更し、局長自らが我々の宿泊するホテルまで訪問いただくことになった。

ミトン初等教育局長と

懇談の冒頭でミトン局長から、「ラオス政府も徐々に教育に力を入れてきているが、施設の整備の予算はない。今後は地方にも力を入れていくよう働きかけていきたい。ＣＳＡの取り組みに感謝していることを伝えてほしい。」との感謝の言葉があった。また、現在全体の９５％以上の子供たちを小学校へ通わせることが出来ていることも説明いただいた。ＣＳＡからは、前日の小学校訪問時の状況などを伝えるとともに、特に要望の強かった屋根の修理（トタン屋根からスレート瓦へ）については、見積もりをとり可能な限り年1校は直せるよう募金活動に努力することを伝えることができた。

ミトン局長は昨年３週間に亘り日本の小学校を訪問し、色々と勉強してきたという。「日本の学校の設備や教育システムの素晴らしさを肌で感じ、ラオスの教育に活かせるように頑張りたい」との発言もあった。

まだまだ、政府の支援も少ない中ではあるが、徐々に道が開けてくるのではないかと感じさせる懇談であった。

募金活動については、自組織でもこの経験を報告し活動を強化させていきたい。

2016年１月20日(水)

10：00～　タイ救援衣類引き渡し式（ウドンタニ貧困者保護センター）

報告：松井　裕一

朝８時にホテルを出発。専用車でラオスからタイへと国境を越え、２時間以上の移動を経て、ウドンタニ貧困者保護センターへ。到着直後から“有名人！？”と勘違いをしてしまいそうなほど、何名ものカメラマン（？）が撮影して下さるなど、多くの方から出迎えていただいた。

当日は気温３３度の晴天。式典は屋外で実施され、約１００名が出席した。代表のタイ社会開発福祉省副大臣のクワン・ポーン氏をはじめ、多くの方から「日本の連合の皆様に助けてもらっている。帰国したらお礼を伝えて下さい」と感謝の言葉が述べられた。また、この活動の歴史等もスクリーンで上映され、参加者は理解を深めることができた。「今回、日本からタイへ送られた衣類は段ボール約６，０００箱分。チームメンバーは、１月２２日にバンコクの衣類倉庫を訪問する」との報告もあった。

団員一人ひとりが参加者に対して自己紹介する時間が設けられ、代表して塩坂団長が挨拶を述べた。その後、団員全員が壇上に上がり、衣類の贈呈式が行われ、お礼としてハンドメイドの布製バッグに入った記念品等のお土産をいただいた。最後に団員たちが参加者全員に衣類を手渡した。やや照れくさそうに受け取る子どもたち、嬉しそうに何度も何度も握手を求める何名もの年配の方の姿があった。

塩坂団長挨拶

タイ 救援衣料引き渡し

QV103　17：00　ビエンチャン発 → 18：00　ルアンプラバン着

2016年１月21日(木)

8：30～　ルアンプラバン県教育・スポーツ省

報告：吉村　隆幸

松井さんの挨拶の後、サイサバ副局長より、歓迎の挨拶をいただいた。「日本の連合の皆さまのお力で、教育が発展した。貢献していただきありがとうございます」、「ルアンプラバンの世界遺産登録は１９９５年１２月で、２０１５年１２月９日に２０年目を迎えた」、「サンティパープ高校の寮生が全国試験大会で優勝した。寮生は大変成績が優秀で、普段から勉強に熱心である」との報告をいただいた。

■質疑応答

Ｑ１．サンティパープ高校の寮に入る募集倍率は？

⇒文部省から各県に推薦を依頼し、各県が頭の良い子、貧しい家庭の子を３０名選んでいる。

ルアンプラバン県教育スポーツ省で

Ｑ２．食費が足りないということだが、一人当たり１ヶ月２５ドルから２７．５ドルにしたが、それでも足りないのか？

⇒一人当たりの１日の予算は７，０００キープ。人数が多くなれば一人当たりの単価が下がるが現状の人数では足りない状況である。

（参考：うどん１杯を外食すると１５，０００キープ）

Ｑ３．寮生はどのような指導を受けて、寮に慣れていくのか？

⇒１年生の時は親元を離れて暮らす寂しさと、自宅では１日３食の食事が、寮では１日２食となるので慣れない子が多いが、２年生、３年生になると将来のために勉強を頑張るので慣れてくる。

Ｑ４．寮生が高校を卒業し、将来、省庁に入った実績はあるのか？

⇒サンティパープ高校の校長に確認していただきたい。

Ｑ５．中退や退学するものはいるのか？

⇒サンティパープ高校の校長に確認していただきたい。

Ｑ６．ラオス全体の教育に対する予算は何パーセントなのか？

⇒政府予算の１８％が教育。県は１５％。

最後に、ワットシェントーンの置物をいただき、記念撮影をしてルアンプラバン県教育スポーツ省を後にした。

９：30～　ルアンプラバン県サンティパープ高校CSA寮

報告：吉村　隆幸

サンティパープ高校の校庭に入ると、寮生達が左右一列に並び温かく出迎えてくれた。学生寮の１階の食堂にて、寮生、校長、寮長等が集まり交流会が始まった。祐延さんの挨拶の後、スントン校長が歓迎の挨拶。さらに、校長は「寮生の目的は一生懸命に勉強をすること、寮生のほとんどが優秀である、卒寮生の８５％が国立大学へ、残りの２５％が外国の大学や日本の大学へ進学している、寮生は普通の生徒と比べると、勉強、運動、文化をしっかりやっている、ＣＳＡからの援助のおかげで勉強が出来ると寮生達は感謝している」と述べた。

高校生寮へ衣類引渡し

■寮長より報告

サンティパープ寮生：１年生３０名（男子２０名、女子１０名）、２年生３０名（男子２１名、女子９名）、３年生３０名（男子２４名、女子６名）

寮の世話係（教師）：２名（男性１名：女性１名）

「３年生は試験大会が終わったばかりである、寮生は自分たちで野菜の栽培をしている、スポーツ大会も頑張っている。全国大会で男性チームは優勝、女性チームは２位、文化を守るための踊りの全国大会で３位だった」とのこと。

また、「基幹労連（旧建設連合）からの寄付で、給水施設を直していただき、水の心配がなくなった。感謝申し上げる」とのお礼があった。

■寮生との質疑応答

Ｑ１．寮の生活で大事なことは？

⇒ブンロンさん　３年生（男性）：寮の生活で良いところは、自宅にいると家族の手伝いをしなければならないが、寮にいれば勉強に集中することが出来る。また、同じ寮生（友達）との交流が出来る。ただ、寮は食事が少ない。寮に入った時、みんな泣いていたが、時が経つにつれて慣れていった。ＣＳＡには感謝でいっぱいである。ＣＳＡへの恩は忘れることはない。皆さんのご健康とお幸せをお祈りいたします。

Ｑ２．将来の夢は？

⇒ブンニャン　３年生（男性）：将来日本へ行きたい。好きな分野は物理。寮にいれば、専門の勉強をすることが出来る。困ることはない。

⇒ワンサイ・モアン　３年生（男性）：自分の得意分野は科学と英語。自分の得意分野は教え、苦手な分野は教えてもらえるのが寮の良いところ。将来の夢は、ＣＳＡのような活動をラオスでしたい。日本の皆さん、この活動（寮の運営）を今後も続けてほしい。自分にお金があれば寮の運営をしたい。

その後、ラオス民族の踊りであるバンメンハオ（おかあさんが生まれた村）を披露していただき、さらに、ＣＳＡメンバーを巻き込んで、見よう見まねで一緒に踊った。

その後も正月の踊りであるブンピーマイを披露していただいた。続いて、我々を歓迎する儀式、バーシーセレモニーを行っていただいた。祭壇のようなものを囲み、全員で輪を作りお祈りした後、寮生・校長・先生が我々の手首に歓迎の言葉や健康のお祈りをしながらスーファン（ミサンガ風）を巻いていただいた。スーファンを3日間巻いておくと幸せになれると教わった。

その後、ＣＳＡメンバー全員から、日本の代表的な歌の披露ということで、「上を向いて歩こう」を合唱した。

交流会の最後にスントン校長より、「ＣＳＡの皆さんと楽しく交流が出来て、寮生たちも、私も嬉しいです。ＣＳＡの支援のおかげです。今後もこの活動を続けていただきたい。寮生たちの将来のために、平和のために。私たちは（校長、先生、寮の世話係）、寮をしっかりと守ります。そして、国の発展のためにも頑張ります。最後に皆さまのご健勝をお祈りいたします。日本の皆さんにもよろしくお伝えください」とお

バーシーセレモニー

言葉をいただいた。

交流会終了後、寮の視察を行った。トイレが不衛生であることから、工事を来週から行うと報告があった。また、調理場では、ＣＳＡメンバーが発見したコンセント口に大量のホコリがついていたので、寮全体のコンセント口の確認をするように伝えた。また、学生寮の屋根が老朽化してきているのも確認し補修が必要なことを確認した。

寮を建設してまだ２０年も経っていないが、いたるところに損傷があった。建設には当然費用がかかることだが、費用を抑えたから工事が不十分なのか、ラオスの建築技術の問題なのか、資材の質の問題なのか、様々な要因があるかと思うが、今後も学校（寮）の建設・補修をする上での課題であると感じた。

ＰＧ946　17：20　ルアンプラバン発 → 18：45　バンコク着

2016年１月22日(金)

９：00～　在タイ日本大使館

報告：佐山　顯

今回我々を迎え入れてくれたのは、坪井一等書記官と吉野二等書記官であった。ＣＳＡメンバーからの挨拶と自己紹介を行い、その後にお二人からタイの労働事情やタイの政治･経済情勢について説明をしていただいた。

在タイ日本大使館で

タイの労働条件として、週休２日制が最も多い、１日の所定労働時間は８時間が最も多い等の内容があった。タイの人々の性格として、基本的には真面目だが傷つきやすい、との説明もあった。欧米諸国に比べると、日本人的な性格や労働条件に近い事がうかがえる。経済面での大きな課題は、後進国よりも賃金は高いが、技術が先進国よりも大きく劣る。ここの部分の改善が、今後の優先課題であるとおっしゃっていた。また、今後はインドー中国間の重要な土地となるという説明があった。その為には、労働集約的産業から高付加価値産業への転換の必要性があると考えておられた。

タイの賃金等の説明の中では、他国と比べて格差がそんなに酷い訳ではない。しかしながら、元々持っている資産で見ればその差は大きい。理由としては、固定資産税が無かった事だと説明いただいた。賃金条件において日本より進んでいるのではと感じておられるのが、取得技能に応じて最低賃金が定められているという点であった。

その後も様々な説明をしていただいた。その後、質疑･応答等を行い、大使館前で記念撮影をして、在日大使館を後にした。

11：00～　タイ社会開発福祉省 救援衣類保管倉庫

報告：佐山　顯

タイ衣類倉庫で

最後の公式訪問として、タイの衣類倉庫を訪問した。訪問時は倉庫を管理している現地スタッフに迎え入れていただいた。

母体は国営の組織であり、高齢者、子供、貧困者への支援を主な活動としているとの説明を受けた。ピアナート衣類責任者より母体の説明や活動状態についての説明を受けた。

私たちが送っている衣類は、防寒着or一般着、大人用or子供用等々の観点から選別作業を行っている。その後、地域にあわせて衣類を送っているとの事であった。「非常に多くの衣類を送っていただいているので、一年かけて全ての衣類を選別し、発送している。様々な種類の衣類が送られてくるが、Ｔシャツが一番扱いやすい。理由は、ニーズが多く使用用途も多いから」との説明を受けた。

12：00～　昼食会、タイ国立博物館など

お別れ夕食会

最後の公式行事後、タイ社会開発福祉省の招待でタイ料理レストランで昼食会後、タイ国立博物館を視察し、タイの歴史に触れた。

さらにスワナプーム国際空港へ行く途中の、ショッピングセンターに立ち寄り、タイの流通について視察。さらに日本食らしいレストランで「お別れ夕食会」をした。皆無事に公式日程を終えることができた安堵感とともにちょっぴり寂しさも…。

NH850　22：45　バンコク発 →

2016年１月23日(土)

06：10　羽田空港着、解団式

タイのガイドさんとお別れ

無事羽田に到着。入国審査を済ませ、塩崎団長の解団宣言後、各自の労をねぎらいつつ再会を誓い、帰路に着いた。

皆様、大変お疲れ様でした。

日本出国

フンペンさんのお出迎え

ポンサイ村小学校で

ラオス保健省の担当官

タイ・ウドンタニで

タイ衣類倉庫で